



REPORT

2008.MARCH No.11

MIE PREFECTURAL COLLEGE OF NURSING



学長あいさつ、附属図書館利用案内 1

教員紹介 2

本学の法人化について、三重県立看護大学大学院看護学
研究科修士課程について、本学附属図書館について
..... 3~4

卒業生はいま 5

サークル紹介 6

地域交流研究センターの今後の展望、編集後記 7



三重県立看護大学

三重県津市夢が丘1丁目1-1 〒514-0116
TEL 059-233-5600 FAX 059-233-5666
<http://www.mcn.ac.jp>

学長あいさつ

学長 村 本 淳 子



平成19年3月末に2代目学長が任期半ばでご逝去され、約半年間の学長代理期間が続きましたが、9月10日付で学長に就任いたしました。この間、皆様方にはご心配をおかけいたしました。私は開学2年目の平成10年4月に本学に母性看護学の教授として就任し、平成13年4月からは学生部長として学生の教育に関する責任を任される立場で仕事をさせていただきました。まだ開学11年ですが、本学の看護学教育の歴史とともに歩んできた感じがしております。

ところで、19年度はこのようなあわただしい変化の中、21年4月の独立行政法人化の実現に向けた準備が、予定どおり4月からスタートいたしました。18歳人口の減少、そして本学が開学した平成9年には五十数校であった看護系大学が平成19年には一五九校と急激に増加し、それにより看護系の国公立各大学とともにその存続をかけて現在競争の渦中にあります。このように全国の大学を

取り巻く環境が大きく変化している中にある本学は、三重県の公立大学として、教育研究の成果の県民への貢献、また優秀な看護師の育成が県民から期待されています。つまり地域連携・地域貢献と優秀な看護実践家の育成、研究の推進が本学の目標です。この目標に向かい、つねに自己点検・自己評価をしながら教職員一丸となり、前進していくべき努力をしております。

しかしどんなにあわただしい中にあっても、私たち教職員は学生一人ひとりの個性を大切に、「自主・自律の精神」と「看護する心」を丁寧に教育することによって、本学の卒業生として自信とプライドを持つて、国内外で活躍していただくよう、日々教育にあたっております。また、県民から親しまれ、愛される大学、そして社会に開かれた大学をめざしてこれからさらに努力してまいりたいと思っております。

附属図書館利用案内

三重県立看護大学附属図書館は、地域に開かれた図書館をめざしています。皆様のご利用をお待ちしております。

◆ 開 館 時 間

月曜日から金曜日

午前9時～午後9時

土曜日及び学生の長期休業期間

午前9時～午後5時

◆ 休 館 日

日曜日・祝日等の休日

年末年始

開学記念日（5月8日）

月末整理日（毎月第4木曜日）

特別整理期間

※詳しくは、本学のホームページ
(<http://www.mcn.ac.jp>) を参照してください。

教員紹介

成人看護学

荒木 美和



平成19年4月に着任しました。3月までは新設校である愛知医科大学看護学部でお世話になり、経験豊富な教職員の方々、個性豊かな学生さんたちと一緒に、創造する喜びや苦難を体験してきました。新しいことを企画・実践するには、時間、お金、忍耐、体力、チーム

ワーク、これまで培ってきた人のネットワーク、楽しむ力、そして何といたっても情熱が必要です。どれも自主的に創り出さなければなりません。経験豊かな先輩教員の後姿は、本当に教えられることばかりでした。「志あるところ道あり」「憧れは実現する」「がんばらないけどあきらめない」「3人寄れば文殊の知恵」「継続は力なり」「いつも喜び絶えず祈りどんなことにも感謝する」「人皆に美しき種子あり明日何が咲くか」「それでも人生にイエスという」などなど、これまで学んできた様々な名文句を机上の空論で終わらせるのではなく、苦難の日々にこそ生かそうと皆で努力してきました。

私は現在、成人看護学領域でお世話になっておりますが、その中でも専門は終末期看護学です。中でも終末期患者の精神的ニードとかかわりについては、看護教員や哲学教員、訪問看護師、病棟看護師など仲間の方々と、毎月一回、事例検討を「こころの看護米野木セミナー」

として20年以上続けています。ここでいう精神的ニードとは、スピリチュアルなニードを指しています。精神面の理解を深めるために、V.フランクル、M.ブーバー、M.メイヤロフ、E.キューブラー・ロス、R.ナオミ・リーメン、トルストイを始めとした研究者・実践者の書籍からも学んでいます。また、ホスピス・緩和ケア病棟、在宅ホスピスを行う訪問看護ステーションの看護師、ボランティア、医師の方々には、学生の実習や様々な研修でお世話になりました。「素敵なケア」をたくさん見せていただき、「ケアの本質」を考える機会をいただきました。ターミナルケア、遺族ケアなど、よく「ケア」という言葉を使いますが、ケアの本質を探究していくことは、終末期看護を考える上で基盤になると思っています。他にも、家族ケア・遺族ケアに注目し、訪問看護師・看護師が行う遺族ケア、男性の遺族に対するケア、看護学生の死生についての考えの育み、看護学生のグリーフケア、家族看護を基盤にした遺族ケアについて研究・実践に取り組んでいます。

看護の可能性や看護の力を看護専門職を目指す学生さんたちと語り合い、また現場の看護専門職の方々と語り合って、人生の終焉までウェルネスを目指した看護と一緒に考えていきたいと思います。三重県での出会いが楽しみです。どうぞよろしくお願いします。

地域看護学

山路 由実子



平成19年4月1日に着任し、地域看護学を担当させていただいております。

私は、これまで保健師として尾鷲・鈴鹿・津・松阪保健所で、県庁では看護人材確保に従事しておりました。保健所では母子・精神・難病・感染症・健康づくり等

の業務を通して、そこで出会った患者さま、ご家族の方、地域で支援してくださっているボランティアの方々、そして保健師をはじめとする看護職や行政の諸先輩方と同僚から多くの学びや気づきをいただくことができました。地域で働く保健師はそこで生活する住民の方を対象に健康づくりや疾病予防、療養支援を行っていく仕事です。そのため出会った方々とは数年間のお付き合いになることが多く、その家族の一員、地域住民の一員的な存在になることも少なくありません。「共に歩む」「家族が

増えた」というような感覚を持つと例えればよいでしょうか。「この方と出会えてよかった」そんな風に思うこともしばしばでした。これまで自身が保健師業務を通じて多くの方にお教えていただいたことを、看護職をめざす次世代の方々に伝えることができれば、そんな思いで着任してまいりました。

これまでも保健所で実習指導者として保健師教育に携わってまいりましたが、教員という立場は初めての経験です。着任して1年近くが過ぎましたが、学生が授業や実習で発する疑問は新鮮で「地域看護」の原点に自分自身がもどる機会を与えてくれます。また、研究分野ではスタートラインに立ったところですが、これまでの業務の中で疑問に感じていたことを振り返り、一つ一つの研究を丁寧に積み重ねていくことで「地域貢献」「看護教育」に繋げてゆくことができたらと考えています。

今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

本学の法人化について

法人化教育特命監 齋藤 真

本学は平成21年4月に公立大学法人三重県立看護大学として法人化することになりました。大学をとりまく環境は、全国的に少子高齢化社会を迎えて極めて厳しい状況にあります。本学も例外ではなく、18歳人口の激減や看護系大学の新增設ラッシュ等さまざまな影響を受け今日に至っております。

三重県民の強い要望により設置された本学は、看護学教育および研究の中核機関として、また保健医療福祉のさらなる向上をめざして三重県健康福祉部とともに歩んでまいりましたが、今後こうした役割を担っていくためには劇的に変化する社会環境に的確に対応する体制が必要となってきました。特に質の高い教育研究を維持し、地域貢献を通じて社会に開かれた大学として存続していくためには、経営資源としての人、物、金を有効かつ効率的に運用する民間企業的な発想、換言すれば経営品質を高める組織活動が必須となつてきます。

しかし公立大学は、私立大学や平成16年に法人化された国立大学とは異なり、設置母体である地方公共団体の組織および体制から柔軟な経営体質に素早く移行できない問題点が多々あります。そこでほとんどの公立大学はこう

した状況から脱却するため、公立大学法人として組織を改編する道を選択しています。

公立大学法人とは平成16年に地方独立行政法人法によりできた新しい制度で、地方公共団体が大学の設置及び管理を行わせるために設立する法人組織のことを意味します。公立大学が地方公共団体から独立して法人化されると、組織や予算等の面での裁量が拡大します。したがって自主的、自律的な大学経営を進めることができます。また法人化された大学は大学独自の判断に基づいた教育研究や地域貢献活動等、特色のある個性的な大学をつくることも可能となります。さらに大学経営には多くの学外役員が加わりますので、公平性、透明性を確保しながら効率性、経済性が図られます。

一方で法人化後の大学は地方公共団体の組織から離れますので、大学は経営に対する全ての責任を負わなければなりません。すなわち法人化された大学は学生の教育、教員の研究、地域への貢献等、さまざまな分野において外部から評価を受け、その結果の如何によつては改善、改革といった努力が求められます。具体的には三重県が策定する中期目標に本学が中期計画を策定

し、その指針に従つて経営を進めます。本学は常に第三者によつて評価を受けていきます。当然のことですが、大学経営の自由度を高めることは同時に自己の行動を厳しい目で査定し、常に適切な方向へ軌道修正をしていくことになります。

本学は公立大学法人として再出発することによってこれまでの体質を大きく改善し、21世紀に躍動する理想の看護大学をめざします。本改革が本学学生や教職員はもとより三重県民のさまざまな期待に応えることができるよう全教職員が一丸となつて努力する所存です。

三重県立看護大学大学院 看護学研究科修士課程について

研究科常任委員長 鈴木 みずえ

科学技術の急速な進歩は、保健・医療福祉にもさまざまな革新的な変化をもたらしています。少子高齢社会の到来、難治性疾患の増加などによって人々の看護に対するニーズも豊かな人間性に満ちた看護ケアだけでなく、生活の質を尊重する高度な医療技術も同時に求められています。最近の動向としては、医療の高度化・専門化に対応できる高度な知識と技術を身に付けた実践看護師、看護研究者が期待されています。これらのニーズへの対応を図り、看護の専門性を追求する方々のために三重県立看護大学大学院看護学研究科修士課程は、平成13年4月に設置されました。

に寄与する看護管理者の育成、看護教育を担う人材の育成、看護学の発展に寄与する研究者の育成を目指しております。

専門看護師 (Certified Nurse Specialist: CNS) 教育課程では、現在「母性」と「精神」の分野においてCNSコースを設けており、平成18年3月には精神看護分野において日本看護系大学協議会による専門看護師教育課程の認定を受けたところです。専門看護師は複雑で解決困難な看護問題に悩む個人や家族や集団に対して、高度な看護ケアを提供するために、特定の専門看護分野の知識及び技術を深めた看護師のことです。看護の専門性を追究することにより、さまざまな看護領域でリーダーシップの取れる人々を

育成しており、現在、精神看護の修了生が専門看護の実践等で活躍しています。平成20年度には母性看護コースもスタートすることとなり、さらに老年看護などの専門看護師課程の設置も予定していますので、その他の領域も含めて希望される方は、ぜひお問い合わせを頂きますようお願い致します。

本学では病院に勤務されながら学ぶことも可能にするために、大学院設置基準第14条の規定により、社会人の修学に特別措置が配慮されています。この特別措置により、夜間や休日の受講により単位を取得し、仕事と大学院を両立させた現役の看護師の方々も数多くいらっしゃいます。仕事の関係、研究方法、家庭状況、経済状況なども考慮して、3年間あるいは4年間で計画的に履修することも可能です。

さらにインターネットによる遠隔地講義、メールによる指導などさまざま

本学附属図書館について

私が平成17年4月より第三代の附属図書館館長を拝命し、早いもので4年目を迎えました。本学附属図書館（以下図書館）は平成9年の開学と同時に開設、学生、教員の教育および研究を支える存在であるとともに、県立の施設として県民の皆様にも学習の場とし

なニーズへの対応も検討しておりますので、本学の大学院に少しでも興味を持つ方がいらっしゃいましたら、大学院へのご要望・ご意見・ご相談などご連絡を頂ければと思います。皆様のご相談、全体の履修の計画などのご相談に応じていきたいと思っています。皆様の看護師のキャリアアップ実現のための一助になればと考えております。

【履修、研究指導等に関するご相談：
鈴木みずえの連絡先】

TEL/FAX:059-233-5631
Mail:mizue.suzuki@mcn.ac.jp

【履修・受験手続き等に関するご相談：
学生課（入試・教務担当）の連絡先】

TEL:059-233-5602・5603
FAX:059-233-5666
Mail:kandai@mcn.ac.jp

附属図書館館長 齋藤 真

てご利用いただいております。図書館の運営は5名の図書館司書（専任2名、嘱託3名）が交替で平日21時、土曜日17時まであたっております。

さて近年の急速なIT化は、学術情報をはじめあらゆる情報の取り込み方に大きな変革を与えてきました。書籍

や雑誌といった紙媒体を通じて情報を得る時代から電子媒体で情報を得る時代へ流れが変わってきました。特にインターネットの普及による資料や文献の検索は、利用者がいつでもどこでも気軽に行うことができるようになり、即座に大量の情報を得ることも可能となりました。また個人がホームページ等を利用して情報を発信するといった新しい形態が定着しつつあります。

しかし電子化された情報は一見便利なのですが、不要な情報が氾濫したり、重要な情報を見逃したりと本来必要な情報を確実に得ていない場合もあるといわれています。従来は情報を得ることに苦労をしてきましたが、現在ではあり余る情報の中から必要な情報を取り出すことが苦労であると言えます。

このような状況を背景にこれからの図書館の役割も大きく変わっていくことと思われます。すなわち図書館は、あらゆるメディアの膨大な情報資源をいかに有効活用していくことができるか、さらに取捨選択された情報をいかに利用者に伝えていくかということが重要であると思っています。

私たち図書館は、利用する方々の立場に立ってさまざまな

情報資源の中から常に必要な情報を必要な時に最も適した形で提供したいと考えています。今後、図書館は平成21年4月に予定されている法人化に合わせ、情報センター室と統合してメディアセンター（仮称）として組織を拡充していく予定です。学生の教育、教員の研究、さらに地域への貢献に積極的に対応してまいりますので、皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



卒業生はいま

平成12年度卒

看護師 中島 直子

平成12年度に卒業し、その後三重県立総合医療センターで働き今年で7年目となります。

7年間、看護の責任の重さや、その他様々な理由で何度も辞めようと思ったことがありました。しかし今も私は看護師として働いています。その理由は大きく三つあります。

まず一つ目は、患者様との関わりの中で、看護の喜びを知ることができたからです。患者様の闘病生活の中で、より身近な存在として、共に考え、悩み、そして回復していく喜びも共有することができる。それを実感することができたからこそ、今までここに居られたのだと思います。

二つ目に、共に働く人たちの存在が大きいです。問題に直面し、悩み落ち込んだ時に、私は決して一人ではありませんでした。常に師長はじめ、先輩看護師の方々、共に働く仲間の励ましや指導、支えなどがありました。患者様に一番近い存在である私たち看護師のチームワークというものは、よりよい看護を提供する上でと

ても重要となってきます。私が働く医療センターでも看護師不足は切実な問題であり、労働状況としても厳しい部分がないとはいえません。しかしそんな状況の中でも、看護師全員が一丸となり、より質の高い看護を目指し頑張っている。このようなすばらしい人的環境の中で自分は働いているのだと、日々実感しています。

そして三つ目に、3年前より担当している実習指導も、私が臨床に留まる大きな理由となっています。指導者という立場ではありますが、学生から学ぶことも多く、実際には自分の大きな成長の場となっています。看護の奥深さを知り、自分の不十分さを知りながらの指導に、今でも正直若干の抵抗は残っていますが、今後も学生と共に学び、看護の喜びを共有していけたらと思っています。

思い返すと、7年間本当に様々なことがありました。そして今では辞めたいという思いはありません。きっとこの気持ちの変化が、私の7年間を象徴しているのだと思います。今後自分がどのような道に進んでいくかはまだ分かりませんが、常に看護師として前を向き、歩いていきたいと思っています。

平成13年度卒

保健師 荻野 妃那

私は、人口25,500人、年間出生数170人程度の町で活動しています。就職して数年は主に母子保健事業を、最近は成人保健事業、健康づくり事業を担当しています。

母子保健事業の活動では、結婚や出産経験も無い中で母親や赤ちゃんの相談に対応することに自信が持てず、母親との関係づくりに悩んだ時もありました。最初はこちらが何かしなければ、という思いが強すぎて保健師としての意見ばかりぶつけていましたが、話を聞きながら母親自身が自分で解決に向かえるような対応をしたときには、母親の表情が明るく変わり笑顔が見られたことがとても印象に残っています。

成人保健事業では、検診の結果のみに着目して検査数値を下げることをだけを目指しては、住民の方はなかなか健康問題を自分の問題として捉えにくく、また信頼関係を築くのも難しくなります。しかし病気を切り口に今後どのような人生を歩んでいきたいかを共に考えることによって良い反応が返ってきた時には、生活改善が目標達成のための有効な手段であることを学びました。

健康づくり事業では、住民の方の自主的な健康づくり活動を支援しています。健康な生活を送るために必要なこと、その地区や住民の方のニーズは様々です。保健師は健康状況を検診結果や各種データの分析から客観的にまとめて報告したり、住民の方の声を形にして行政の中で報告する役目も担っています。個人の健康が保たれて初めて町も健康になることができます。町の健康づくりは保健師だけではできず、住民の方が自らの健康に関心を持ち、健康づくり活動につなげていくことが大切であり、住民の方が主体・主役になって活動できるよう運営支援しています。

保健師になって思うことは、自分の対応について住民の方は素直に返してくださるので、きちんと向き合っ、一緒に考えていく姿勢が大切だということです。様々なライフステージ、考え方に会いますが、自分の価値観に固執せず、広いアンテナを立てて、じっくり相手に接することも必要です。また、何かをしなければならぬという姿勢よりも、住民の方が持っている力を引き出したり、のばしたりするような支援もあるということが働き始めてからの学びです。これからも住民の方と一緒に育つ保健師でありたいと思います。

バドミントンサークル「ミントん」

バドミントンサークル「ミントん」です。

活動を始めてから約2年経ちました。初めは7人しかいなかったメンバーも、今では39人と大幅に増えました。みんな賑やかにバドミントンを楽しんでいます。

このサークルは、運動不足を解消することを目的に活動を始めましたが、それ以外にも勉強などの日頃の疲れもリフレッシュできています。

活動は毎週水曜日に行っており、それぞれが自由に楽しく試合をしたりしています。

バドミントン以外にも、サークルのみんなで新入生歓迎会などを企画したり、より仲良くなるために食事会をするなどしています。このような活動を通して、学年を超えた交流が出来ていると思います。

これからもサークルメンバー同士仲良くしていき、より楽しく充実した大学生活を送っていきたいと思っています。



サークル代表 村林 英美

m.c.n 小児糖尿病研究会

小児糖尿病研究会というサークルは、毎年夏休みに開かれている東海小児糖尿病サマーキャンプという東海地区の小児糖尿病の小学生から中学生までの子ども達が集まり一緒に生活を共に過ごし、インスリン注射の自己管理能力の見直しや、遊び、糖尿病についての勉強会、野外炊飯、キャンプファイヤーなどたくさんの企画があるキャンプに参加するボランティアサークルです。キャンプでは主に子ども達と触れ合ったり、遊びと勉強の二つの企画の時間を持たしていただいているので企画運営やキャンプファイヤーの出し物を行っています。このサークルは三重大学との合同サークルであり、夏のキャンプに向けて1ヶ月に1回部会を開いて企画についてどのようにしたらより楽し



んでもらえるか、また学んでもらえるかを練りながら話合っています。みんな子どものことが好きな人ばかりなので楽しくやっています。また他県の大学の人や医師の方や医療関係者の方々とも知り合いになることができるので、いろいろな話を聞くことができます。子どものことが好きで一緒にキャンプに向けて企画をやってみたいという方は是非部会に一度来てみてください。

サークル代表 的場 威

地域交流研究センターの今後の展望

地域交流研究センター長

佐甲 隆

みなさん、こんにちは！

平成19年10月から、地域交流研究センター長を務めている佐甲隆です。どうか、よろしくお願いします。センターの活動内容については、前号のMCN REPORTで伊藤薫講師が紹介していますので、ここでは、最近行っているそれ以外の活動についてご紹介します。

まず、高齢者が元気になる取り組みとして、高齢者自らが着たい洋服を開発し、高齢者自らがモデルになった「ファッションショー」を企画・運営しました。これは、「産業リーディング展みえ2007」で行い、NHKテレビで放映されたり、新聞報道されるなど注目され、好評を得ました。また、ケアする人へのケア（癒し）の必要性から、「ケアする人へのセルフケアセミナー」を開催しました。内容は、交流分析、音楽療法、素敵なケアへのワークショップなどですが、ケアする人たちのピアカウンセリングの場となり、感動の渦に包まれました。皆さんもこのような場に積極的に参加してみませんか。

現在三重県立看護大学では、平成21年度からの独立法人化にむけて、さまざまな検討がなされていますが、その一環に当センターの方向性の見直しがあります。まだ、決定の段階ではありませんが、私の考えている今後の展望を少しご紹介したいと思います。

これからの三重県立看護大学では、「地域貢献」と「社会に開かれた大学」が重要なキーワードになるかと思っています。そこで、当センターは、特に研究支援・知的支援を軸に社会貢献や協働研究を地域とともに

に進めていく窓口になっていく必要があります。特に、ヘルスプロモーション理論をコアに、地域での看護実践現場と大学の橋渡しができるよう、様々な活動を進めていきたいと思っています。

具体的には、まずヘルスプロモーション的実践活動の開発支援です。すでに、名張市などでのヘルスプロモーション的介護予防活動の展開支援や、津市でのヘルスツーリズム推進事業支援などの地域ヘルスプロモーション活動への参加協働を行っていますが、このような活動をさらに展開したいと思っています。また、学内でのヘルスプロモーション実践活動として「元気いっぱい運動」などを、多くの方の参加協力を得て進めていきたいと考えています。どうかよろしくお願いします。

次に、コミュニティ支援です。これは、特に本学卒業生などが働いている医療機関や福祉施設を始め、様々な団体や民間企業などとも協働して、地域での看護実践の質的向上を図る研究活動や、ヘルスプロモーション実践活動に知的支援を行うものです。また、研究支援や、人材育成にも貢献したいと思っています。さらに、行政・自治体支援として、保健医療看護に関する政策開発や政策実行支援を行っていきたいと考えています。

このように今後の地域交流研究センター活動の重要な柱として、ヘルスプロモーションを位置づけ、地域と人々を元気にし応援する仕事を進めていきます。センターの活動への多くの方の参加、協力は歓迎です。よろしくお願いします。



編集後記

毎年度末に発行してきたMCN REPORTも今回で第11号となりました。国立大学そして多くの公立大学が独立行政法人化しているなかで、本学も独立行政法人化に向けて準備を進めております。独立行政法人化への取り組みについて、そして本年度新たに就任した村本学長のあいさつ、新任の教員紹介など本学の新しい歩みを今回紹介しました。また、平成9年に開学した本学は多くの卒業生を輩出しており、活躍している卒業生からの便りも掲載しました。在学生からはサークル紹介を、さらに大学院、図書館、地域交流研究センターの紹介も盛り込みました。編集・発行にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

広報・公開講座委員会委員長 村嶋 正幸